

メンヘラで何が悪いの？：自殺排除主義への当事者的抵抗

河村 菜那 (Nana Kawamura)・竹下 昌志 (Masashi Takeshita)

北海道大学文学院哲学倫理学研究室・名古屋大学大学院情報学研究科

※聴講の際の注意事項：本発表では自殺や自傷について扱います。発表中に実際の事例を詳細に扱うことは避けますが、自殺や自傷に関連する内容が含まれます。聴講の際はいつでも退席していただいて構いません。以上のことを理解していただいた上でご参加いただければと思います。

本発表では、自殺志願者に対する抑圧、すなわち自殺排除主義が日本のメンヘラと呼ばれる女性に対して生じていることを指摘し、女性の自殺志願者に対するステレオタイプにいかにして抵抗するかを考察する。具体的には、女性の自殺志願者の「死にたい」という証言が二次的目的（「構ってほしい」等）の表れであるとして、正当に扱われないという問題を、認識的不正義の一つである証言的不正義 [Fricker 2007=2023] として扱う。そして、その証言的不正義をメンヘラに対する侮蔑を手掛かりに分析する。その上で、女性の自殺志願者に対するステレオタイプにいかにして抵抗するかをリストカッターの事例を手掛かりに考察する。

まず本発表では、自殺排除主義という概念を紹介する。自殺志願者は、同意なき身体拘束や主体的経験の軽視、「病んでいる」という偏見の押し付けなど、多様な抑圧を受けてきた。例えば、自殺のリスクを理由に、拘束や措置入院が行われることがある。一見すると、これらは自殺を防ぐために正当化される措置のように見える。しかし、こうした介入こそが、自殺志願者の自律性や合理性を否定し、偏見に基づく暴力となり、自殺志願者の声を奪っている。

自殺排除主義は、このような害を正確に記述するための概念である。提唱者 Alexandre Baril は、自殺排除主義を自殺志願者に対する暴力や抑圧として定義する [Baril 2023]。Baril の議論は、クィア理論とクリップ理論に基づき、自殺志願者を一方的に治療対象とみなす視線を批判する。自殺排除主義の根底には、自殺願望を持たない者は正常であり、持つ者は異常であるという前提に基づく権力関係がある。この構造により、自殺志願者は信頼できない主体とされ、認識的暴力を受ける。ではどのように自殺排除主義に抵抗すればいいだろうか。Baril 自身はトランス肯定的医療を参考に、最後に自殺するという意思決定を否定しない、自殺肯定的医療を提案する。これにより、自殺志願者が周りの支援者に自身の考えを伝えることができるようになり、自殺志願者に対する認識的不正義に抵抗できるようになる [Baril 2023]。しかし、こうした提案は、非自殺志願者が自殺志願者をどう支援すべきかということにとどまっており、自殺志願者当事者が自殺排除主義にどのように抵抗すればいいのかを示すことができてない。

本発表では、日本のメンヘラと呼ばれる人々に対する自殺排除主義を指摘し、また当事者らの実践を検討することで、自殺排除主義への当事者による抵抗の方法

を見いだす。まず本発表では、自殺願望を持つ女性が、いわゆるメンヘラとして扱われることについて、否定的側面と肯定的側面を論じる。「メンヘラ」とは元々、匿名電子掲示板「2ちゃんねる」上のメンタルヘルス掲示板に書き込みをしている心に問題を抱えた人の総称であった[寺西 渡邊 2021]。次第に、「メンヘラ」という語が認知されていくにつれ、情緒不安定で執着的な愛情をみせ、付き合っていくのが大変、精神的に病んでいると認識される女性を指す用語として、否定的に使用されるようになった[寺西 渡邊 2021; Seko & Kikuchi 2022]。

本発表ではまず、メンヘラとされる人々が被る自殺排除主義を指摘する。例えば、女性の自殺志願者による「死にたい」という証言に「構ってほしい」といった二次的目的があるとみなされ、正当に聞き入れられないことがある[Spencer & Broome 2024]。こうした事例はまさに自殺排除主義の一形態としての証言的不正義である。

一方で「メンヘラ」という語の肯定的側面として、この単語が自殺願望を持つ女性にとって肯定的に働くケースについても指摘する。上述のように、他者から「メンヘラ」とラベリングされることは否定的意味合いを持つ。しかし、あえて自身のことを「メンヘラ」と自己ラベリングすることで、メンヘラであることを肯定的なものとして取り返すことができる。例えば、地雷系ファッションや「病みかわ」などのファッション形態を「メンヘラファッション」として捉え、「かわいい」ものとして肯定的に扱うことで、メンヘラであることを肯定的に捉えなおすことができる[Seko & Kikuchi 2022]。こうした営みが「クィア」や「クリップ」という語を反転的に使用することと類似していることは注目に値する。本発表ではさらに、より急進的な抵抗方法の一つとして、リストカットの傷（リスカ痕）を隠さないという実践を検討する。現状、リスカ痕は「グロい」「気持ち悪い」といったイメージによって隠すことがマナーであるとされている。しかし本発表では自殺排除主義に対する抵抗方法の一つとして、リスカ痕を普通の傷と同様に扱うことで、メンヘラ＝異常といったステレオタイプに抵抗できると論じる。

参考文献：

Baril, A. (2023). *Undoing 自殺排除主義: A trans, queer, crip approach to rethinking (assisted) suicide*. Temple University Press.

Fricker, M. (2007). *Epistemic Injustice: Power and the Ethics of Knowing*. Oxford University Press. [佐藤邦政 監、飯塚理恵 訳、『認識的不正義：権力は知ることの倫理にどのようなかわるのか』、勁草書房、2023 年]

Seko, Y., & Kikuchi, M. (2022). Mentally ill and cute as hell: Menhera girls and portrayals of self-injury in Japanese popular culture. *Frontiers in Communication*, 7, 737761.

Spencer, L., & Broome, M. (2024). Suicide ideation and testimonial injustice. *Journal of Medical Ethics*, 50(1), 15–20.

寺田拓晃, & 渡邊誠 (2021) 「メンヘラ」の歴史と使用に関する一考察. 『臨床心理発達相談室紀要』, 4, 1-16.